

日本音楽集団 第十三次海外公演の記録



再び新ゲヴァントハウスでゲヴァントハウス管弦楽団と
〈急の曲〉を演奏する日本音楽集団

◆日本音楽集団第十三次海外公演日誌（一九八四年九月二十三日～十月二十日）

福田 輝久

創立二十周年を迎えた今年、私達日本音楽集団は独自の音楽文化使節として第十三回目の海外公演を成功裡に終え全員無事帰国致しました。

今回訪問した国々はソ連（レニングラード、モスクワ）、東ドイツ（フランクフルト・アム・オーダー、ライプチヒ、東ベルリン）、フランス（パリ）、フィンランド（ヘルシンキ）の四ヶ国です。今回は二本稔作曲「急の曲」をクルト・マズア指揮ゲヴァントハウスオーケストラとのライプチヒ・東ベルリンでの再演、そして同曲のペルティ・ベツカネン指揮ヘルシンキ・フィルハーモニーオーケストラとの初演の他、待望であった初のフランス・パリ公演（日産自動車提供）、そしてやはり初のソ連公演という特徴ある公演旅行を行いました。各々の地で音楽を通じ思想も主義をも越えた音楽の輪、人類の和を築きあげ、そして共に歌いあげたという意義と感動とを全員が新たに心に銘記することができたと確信しています。この九月は我々にとって正に芸術のシーズンであり生活の為の重大な時期。それにも拘らず参加したメンバーは熱き次期を担わんとする、所謂中堅。音楽面は勿論のこと舞台、荷物管理、日常生活面等にチームを組み活躍しました。何事も無く旅を終えることができたことは、先方の受入がしつかりしていたことは無論、こうした若い力もあつたことを忘れることはできません。（国際交流基金助成、マネージメント協力・ジャパン・アーツ）

■参加団員名

笛——西川浩平・竹井誠（兼尺八）
尺八——三橋貴風・福田輝久・米澤浩・坂田誠山（バリのみ参加）
胡弓——畦地慶司
三味線——坂井敏子（太棹）・太田幸子
琵琶——半田淳子・山村美子

箏——吉村七重・木村玲子・内藤洋子・滝田美智子・島崎春美
打楽器——黒坂昇・細谷一郎・日黒一則
指揮——田村拓男（兼打楽器）
音楽監督・プロデューサー——二本稔

） プ ロ グ ラ ム （

Aプログラム

一、新八千代獅子（二本稔・藤舎成敏・畦地慶司・野坂恵子編曲）

西川・福田・畦地・太田・山村・木村・内藤・滝田・島崎・黒坂・細谷・田村

二、扇の的

琵琶弾き語り 半田淳子

三、ファンタスマゴリア（長沢勝俊）

全員 指揮 田村拓男

—— 休 け い ——

四、秋の曲（二本稔）

尺八／三橋貴風 二十絃箏／吉村七重

五、巨火（二本稔）

全員 指揮／田村拓男

注：東ベルリンでは（古代舞曲による）パラフレーズ（二本稔）

Bプログラム

五ページの内容説明参照。但し、文様Ⅰ・田舞・五段の調・踊る春は三木作品。鬼の念仏・ニホボは長沢作品。ねとりⅡは三橋と福田が、五段の調は吉村と木村が交替で演奏。

アンコール (A・Bプログラム共に)

トロイカ (ソ連)

ジェ・デュ・ボン タバ (仏)

ロンド (バツハ)

江戸子守唄

八木節



モスクワの〈巨火〉

日程・演奏地記録

九・二三 十時成田発 (フィンランド航空機)

九・二四 十二時ヘルシンキ発レニングラードへ (汽車)

九・二五 レニングラード公演 エストラダ劇場 Aプロ

二十四日夜八時過ぎ、どしやぶりの雨の中通訳のユラさんとイリーナさんが我々を迎える。公演初日、旅の疲れもみせず皆頑張る。日本領事館からおむすびの差入れ、そしてホールのおばさんから大きな西瓜のプレゼン。演奏後ホール館長より「すばらしかった」と感謝の言葉。

九・二六 レニングラード公演第二夜 同劇場にて Bプロ

ホールは一見すると芝居小屋風だが、れっきとした音楽ホール。コンクール等も催されるという。八千代獅子、巨火等の照明合せも順調に。初演のBプロも大成功を収める。アンコールに江戸子守唄、八木節それにトロイカ。会場もなごみ拍手が鳴り止まず。

九・二七 夜行列車にてモスクワへ
九・二八 モスクワ公演 エストラダ劇場 Bプロ

ホールはどういうわけかレニングラードと同名。クレムリンを望める程に位置しホテルにも近い。半円形のホールでキャパは一五〇〇。テレビ局が録画。モスクワの聴衆は大声ではないが皆口々にブラボーをいいながら拍手をするのがうれしい。

九・二九 モスクワ公演第二夜 同劇場にて Aプロ

午後五時過ぎまで軽音楽バンドコンサートのため会場使用が遅れる。しかし舞台係の人々がよく手伝って舞台作りもスムーズにソ連の民族楽団の指揮者がこのモスクワ公演両日ともつきつきりで聞き、「巨火」を自分達でやりたいと興奮気味に語ってくれた。四つの通信社の取材で三木プロデューサーは対応に追いまくられる。公演後ホテルにてソ連公演の成功と再来を祝って乾杯！ ロシア語のジョークも飛び出すほどになったのに今宵

で最後とは!!

九・三〇

東ベルリンに向つてモスクワ・シエネチエボ空港を出発。東ベルリンからバスにてフランクフルト・アム・オーダーに。

一〇・一

フランクフルト・アム・オーダー公演——カール・フリッツ・エマヌエル・バッハホール Bプロ

オーデル川をボートランドとの国境にしたその川辺に立つ教会を改築しホールにしたという。落ちついたたずまいの中にあるBプロも手慣れて興味深い出来。アンコールにバッハのロンド他……拍手も熱い。流石にドイツだ。

一〇・二

バスにてライプチヒへ移動。昼着。

懐かしの我家に戻ったと思う町ライプチヒ。到着するやいなやホールへ。リハーサルに臨む。久々の顔顔……。三年前の感慨も新た。夜中一時過ぎパリへの先乗り組が出發。畦地、山村、島崎、無事を祈つて見送る。

一〇・三

ライプチヒ・ゲヴァントハウスオーケストラ公演 「急の曲」に出演

この公演はホールにかかわる人々の一般招待公演だという。そう言えば拍手がちよつと違う感じ。

一〇・四

ライプチヒ・ゲヴァントハウスオーケストラ定期第一夜 「急の曲」出演

今日から連日の定期公演。出し物は他に現代曲のバイオリンコンチエルト、ベートーベンのシンフォニー八番。午前中は東ベルリン(十一日)での「古代舞曲によるパラフレーズ」の練習をゲヴァントハウスの小ホールにてクルト・マズア氏の奥様である櫻井倍子さんをソプラノにゲストとして迎えリハーサル。大君のマズア氏も度々練習をのぞきにきて「すばらしい曲だ、なんとデリケートな作品だ」を連発。きつとなかなかのパラフレーズになりそうだと思う。早くその日が待たれる。

一〇・五

同定期第二夜 「急の曲」に出演

三年前から、もうこの新ゲヴァントハウスの名物のようになって「急の曲」が終わると衣装や楽器を片付け客席へ。ベートー

ヴェンを聞きたいとの申し入れに席をリザーブして下さる。一時の心安める時を経て「さあ、パリ行きのパッキングにかかろう」

一〇・六

ライプチヒ駅より汽車にてパリへ移動(西ドイツ・フランクフルト経由)

一〇・七

早朝パリ東駅着。先乗り組の坂田・畦地・山村・島崎が迎え。体を休める暇も無くホールへ。入念な打ち合せと音合せが続く。文化の先進国でいったいどの様な評価を受けるのであろうか。

一〇・八

パリ公演第一夜——サル・ガヴォー Bプロ

ホールは箱形の二階席を持ち舞台は雛壇型。残響は少ないが音は通る。開演午後九時……拍手が止まない……終つてホールのマネージャーから「一週間やりたかった!」「全仏で一ヶ月はやりたい」などとうれしい言葉。「歌舞伎や能もいいが、こういうものをもっと早くやりたかった」と日本大使館の人々。

一〇・九

パリ公演第二夜——同劇場にて Bプロ

日産自動車提供でもあり、だいぶ邦人も見られる。公演後は両日ともホールにてワインパーティーが催される。外の寒さが嘘の様な人いきれ。各々に交流を深めあう。第二夜の演奏は我々の持てる力を十二分に発揮することができ(勿論初日もだが)充実感を味わう。そして満足感と……。

一〇・一〇

朝七時パリ東駅発東ベルリンへ移動。

パリのみ参加の坂田他お世話になった方々が見送ってくださる。途中フランス国境に近い町メッツにて楽器が下されかかりそれに気付いた黒坂さん大殊勲。もし、そのままだったら、翌日の公演は取り止めになったかも。

一〇・一一

東ベルリン公演第一夜——コミッシェ・オパー Aプロ

あわただしかったパリの三日間から東ドイツへトンボ返り。ブランドンブルク門からつづくウンター・デン・リンデンの裏に位置する由緒あるホール。櫻井倍子さんを迎えた「古代舞曲によるパラフレーズ」すばらしい喉を聞かせてくれた。来年の末

にマズア氏が来日の予定、その折に今日の再演を東京でやろうではないかと誓い会う。Aプロもこれで完了。

一〇・一二 東ベルリン公演第二夜―同ホールにて Bプロ

このホールは名の如くオペラ専用劇場で舞台は斜傾して奥行もあり中の装飾もすばらしい。この第二夜のコンサートも自主公演Bプロ最後であり皆燃えた。それ故か特別な好評を得た。拍手と足ぶみとブラボーが鳴り止まず、それに応える為のアンコール時間なんと二十五分、この様なことはこのホールでなかなか無いことだと後になって聞いてまたビックリ。この十一・十二日の公演はベルリン音楽祭の一環として行われ、私達の参加がこの行事の主旨でもある伝統と現代という観点からもこの音楽祭にピッタリだと実行委員のベシユケさん。そして東独側マネジメントから二年先の来独を要請される。その時はチャーター機の空きを利用したらとの案も出る。

一〇・一三 東ベルリン―シャウシュビルハウス―ゲヴァントハウスオーケストラとの「急の曲」公演

コミッシェ・オパーからほど近い場所であり、改築から今日が十三回目の公演だという。集団もこれが十三回目の海外公演、何と奇遇なことであろうか。ホール内壁には名だたる世界の作曲家の胸像がはめ込まれている。決して派手ではないが落着いた雰囲気。テレビ局が録画取りに来る。公演終了後同ホールにて日本大使も同席し観迎レセプション。尚ゲヴァントハウスオケは二日後に四十日間のアメリカ公演に行く。マズア氏はアメリカのマネージャーに、「年後「急の曲」をやる提案をするという。実現してほしいものだ。

一〇・一四 東ベルリンから西ベルリンへ、ハンブルグを経由してヘルシンキへ移動

一〇・一五、一六 九月二十三、日乗り継ぎ地としてヘルシンキ入りして以来、木々の葉は色づき、そして多くは落葉していたがやはり北の地だけあり日中でも五度前後の気温、夜は零度で東京ならば冬だ。十五日に初練習、最初とあってお互いの息がいま一つ。

翌日はまずまずの出来上り。ヘルシンキフィルは度々来日している様で楽員控え室のあちこちに日本でのポスターが貼られている。

一〇・一七 ヘルシンキ―フィンランディアホール―ヘルシンキフィルハーモニーオーケストラ定期「急の曲」第一夜

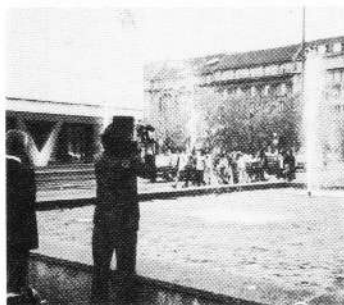
ホールが位置する場所は湖の岸辺にあり白樺の木々が揺れ冬鳥が戯れる、そんな美しい環境の中にある。建物も大変すばらしい。作りは我々が日本でよく使うホールと同じ現代的なものであり、音もなんとはなしに馴染める気がする。ゲヴァントハウスとの共演の時は集団は最後部に位置して演奏したがそのスペースが取れず最前部にセットする。

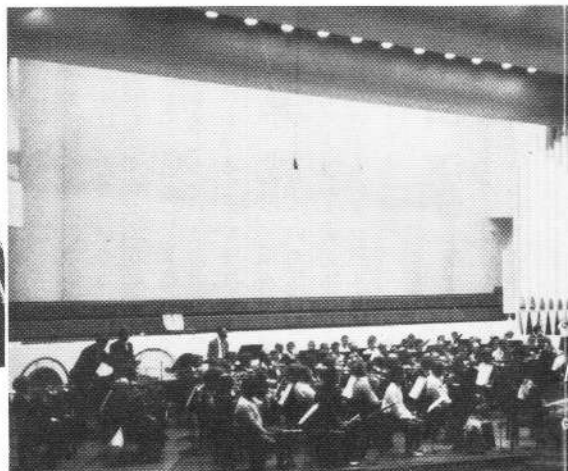
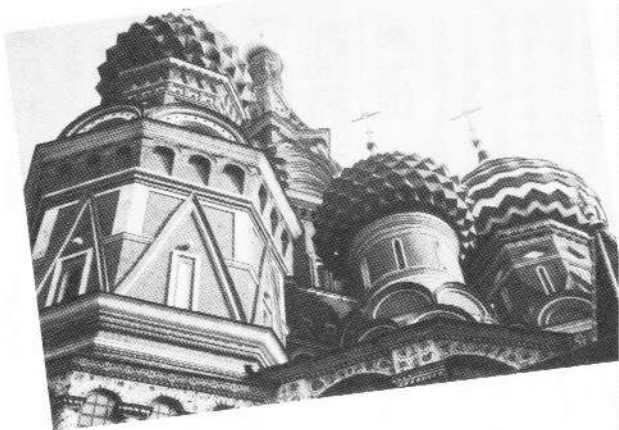
一〇・一八 同定期公演「急の曲」第二夜

我々の今回の旅も今日限り、精一杯やろう。今日で四十才を迎えたベルティ・ベツカネン氏の力強いタクトが振りおろされる。今まで聞こえなかった音をも創り出した。邦欧の楽器もホルのアクースティックスのせいもあり大変バランスよく調和していた。オケの楽員達は次々と「今まで弾いた現代曲で最高に好きだ」と我々にその感動を言ってきた。彼らは人見知りをするのか最初はあまり話しかけたりはしなかったが「演奏しながら心を打たれた」という気持は隠せず、次第に心が溶けあっていた。

明日は東京だ……。近い将来再びこの思いを再現することができればこれ以上のよろこびはない。

一〇・二〇 十六時、成田帰着。





ヘルシンキ、フィラデルフィア



ベルリン、シャウシュビルハウスの夜景

「団員の感想より」 (抜粋)

●田村 拓男

日本の音楽を古典から現代まで、ソロや合奏をおりませ、ねとりといういくつかの即興的な部分を加えこさせるに充分なものがありません。

その中には、日本の伝統音楽を知る上で必要な要素は、ほとんどと言っていいほど網羅されており、今日に魅せる日本の伝統を伝える、現代の日本のバイタリティを伝える恰好のものであったと思われまふ。また、日本の伝統楽器のアンサンブルをすすめていく上での指揮者のありかたについては、常に考えるところですが、今回の旅行の中でまた一つ新しい指揮者像を試みたこと、今後、豊かに、多彩にかつ楽しく音楽創造を展開して行けそうな気がしてきました。

今回初訪問のソ連・フランスを加え、今までに多くの国々を廻り、日本の音楽を通じて大いに親善に努めてきました。ベルリンの聴衆の二十五分間におよぶ拍手に象徴されるように、我々のやってきた仕事に対する評価には確実なものがあると思われまふ。今回の旅行中に、次の招待の具体的な計画が検討されるという事実は、お世辞だけではないことを物語っていると思われまふ。これは集団にとって大きな財産を築きつづめることであり、今回のメンバーが若手を中心に組まれ、彼らが着実に成長し、大任を果たして来たことともあわせて喜びたいと思います。(「赤旗」十一月二十四日付に田村の報告文あり)

●太田 幸子

三味線という楽器はソロで舞台に乗ることは大変少ない。特に今回の「巨火」のような大編成の中でのソロは大きなプレッシャーだったが、回を重ねるたびに自分の世界の中に入れるようになり、だんだんおもしろくなってきた。

「急の曲」では、日本での演奏を含めると、四人の指揮者による「急の曲」を演奏してきたことになる。初めは、指揮者が変わるたびにおどおどしていたのが、最後の頃には、大分余裕が出てきたように思う。しかし、同じ曲でも指揮者によって、そしてオーケストラによって、こんなに違うものかと感心させられた。また、言葉の通じない者同士が同じ舞台にのり、同じ曲を一緒に演奏できたこの感激は、今までに味わったことのないものだったように思う。

●滝田 美智子

ライブツィットとベルリンにおいて、ゲヴァントハウスオーケストラと再会し、あの素晴らしいホールで再び「急の曲」を演奏できたこと、ベルリンでアンコールを求める驚異的な拍手に興奮したこと、パリでも集団がともモチたことなど、数々の思い出を胸に一ヶ月の旅を無事に終え帰国しました。……今回の旅のスケジュールは、過去私が参加した海外公演の内でも最も充実したものでした。……が、ブランドンブルグ門を訪れたり、フランクフルト、ベルリンの東西の国境をバスや電車で通過する時、様々な話が胸裏に浮かびました。自由国に生まれ育った私は、「自由」をごく自然に、又時には忘れて毎日過ごしています。しかし何かのために、誰かのために、生まれながらにして制約の中で一生を送る人々が世の中には沢山いるのです。もちろん私にはどうすることもできない問題なのですが、今回の旅行では胸の痛みを感じるようなことが幾度ありました。

●竹井 誠

演奏は、単独公演、(急の曲)ともよかったと思います。特に(急の曲)は回数を重ねるに従い、自分以外想いがらんと変わったのも楽しかったことの一つです。

また、二十人のメンバーと約一ヶ月行動を共にしたこと、お互いにいろいろな面を知ることができたのも収穫だと思っています。

●半田 淳子

今回の演奏旅行で特筆すべきは、十月十二日ベルリン、コミッシュー・オペラでの二日目の夜の演奏会です。手になりやまず、しばらく興奮の渦の中に押し流された。

集団という一つの群の中に存在して、私達は音を通してその人生を語っていかねばならないし、生き方、方向性、思想性

「メッツの奇跡」

米フロ野球の話ではない。ここ

はフランス東部、パリ——フラン

クフルト間の国際列車が機関車を入

れ替える仏独国境にあと四十歳の

停車駅メッツ。フランス国鉄に

三十万円支払って特別増結しても

らった豪華な貨客車のコンパート

メントで、東京メッツならぬニッ

ポニアの団員たちは熟睡していた。

前夜十月九日は誰しも睡眠不足

であった。何しろ九時開演のバリ

公演の成功で、一時頃までかかつ

たパーティーは、バリの人々まで

が、と団員たちがとまどううれし

いサイン攻め。英雄たちはホテル

近くの日本料理店へみきで、日

産の吉田さん、電通YRの宮崎さ

んたちを混え、満ち足りた二次会

勿論、三次会で徹夜組もいた。

フランスの汽車はまことに静か

で眠るには快適である。行先は終

着駅、多い人で百数十回の海外公

演に旅慣れた英雄たちは高いびき

も当然ではないか。

が、一人胸騒ぎを覚えた者がい

た。黒坂昇。ふと目が覚めて廊下

に出た彼は、楽器係の責任感から

右側の貨物室に視線が行く。おか

といったものは、多くの人の集まりであればある程、むずかしいことである。これまでの海外公演の成功にあらためて感激しながら、これからの集団を思い、団員一人一人の胸の中には、複雑な思いがよぎったのではなからうか。

●細谷 一郎

結論から言えば、大変有意義かつ、楽しい旅行であり、参加できて本当に良かったと思っています。集団の音楽は、日本人でなければ不可能なオリジナリティがあり、そのことは、外人を前にした演奏でも、ブレイヤーの精神にとって非常にプラスに働くと思います。私の経験では、外国オーケストラと共演した時は、やはり一つの引け目のようなものを意識しがちでしたが、今回は全くそれを感じずに、気分よく演奏することが出来ました。又、旅行のスケジュール、待遇とも、最高であったと思います。

●目黒 一則

今回は、同一のプログラムを持って様々な国々、民族（自由主義国・社会主義国）の人々と触れ合うことができて、彼らの私共の音楽に対する異種の受け取り方を感じたとともに、私にとってはそれらに共通される日本的なキャラクターに気づかせてくれたということは大きな収穫であった。

●山村 美子

公演の中で一番印象に残っているのは、やはりベルリンで最後の「巨火」をやった時の事です。〈急の曲〉に出ない私にとっては、この日が今回の旅行での最後の出番だったのです。最後のドラの余韻が消えたと、拍手とブラボーと感動をあらわす足の音、演奏中は指揮と譜面から日が離せなかったのですが、この時初めて客席へ目を向けると、一生懸命にうれしそうに拍手をしてくれているお客さんの顔が見えるのです。「来て良かった」と思わず声に出して、つてしまいたいそうなくらいでした。

●吉村 七重

今回は、一ヶ所で二回、三回と続けて演奏会を持つことができたので、どこも鮮かに印象が残っています……。心配の種だったパリ。サルガボアでの演奏会でしたが、お客様がとても喜んで下さる姿を見て本当にホッといたしました。

又、東ベルリンでは二ヶ所で公演がありましたが、集団単独公演があったコミッシュ・オバーでは、一日目のトリの曲「古代舞曲」による「パラフレーズ」のソプラノヴォカリーズにDDRで活躍中の櫻井啓子さんをむかえ、曲のムードとぴったり合ったソプラノに、お客様も集団側も大いに満足を得ました。又、二日目の「巨火」のあとのアンコールは二十五分間も続いて我々をびっくりさせました。その他、初めて訪れたソヴィエト、ライプツィヒ、ヘルシンキでの「急の曲」の共演など……、様々な思い出を残して旅を終りました。

集団が二十年前かかって創り上げてきた音楽が、どこの国の人達とも共通の意識を持って楽しむ事の出来るものである事を教えて下さった今回の訪問国のお客様たち。それは未来に向けての集団の演奏活動にとってかけがえのない力となるでしょう。

●米澤 浩

二つのヨーロッパツアーを終了し今思うと、全く反して二つの印象がある。ゲヴァントハウスでの演奏やその時の聴衆の暖かい反応、そして集団独自の最終公演、ベルリンのコミッシュ・オバーでの拍手などは、自分が酔ってしまうのに充分であった。ゲヴァントハウスホールの拍手は、まるで天井までゆっくりと水が満ちてゆくようにホールを満たし、ベルリンでは聴衆の踏み鳴らす足音が地鳴りのように迫り、足元から自分が押し上げられるようであった。

その時舞台上に立っていた自分は、感動を共有したという感激に満たされた。人の心が、楽器の違いをのり越えた音楽が、融合したという確信に近いものを感じた。ソヴィエト、パリ、そしてヘルシンキでも同様であった。人間が融合し共存できる可能性をまのあたりにしたのである。

しかし、その興奮を冷やしてしまいうヨーロッパも存在した。国境である。私の過去の旅行が全て西側だけで、その存在をあまり意識したことがなかっただけに強烈な印象であった。自分自身戦争を知らず、又、国境を実感しにくい国に育ったためか、鉄条網と兵士が監視する国境というものの存在自体に、強い精神的生理的嫌悪感を抑えることができなかった。その存在は、人をとがめ立て拒絶するためだけにあり、融合や共存などは否定してしまふ冷たさだけがそこにはあった。

想えば、我々に冷たい監察の視線を向けた入国管理官と、我々に熱い拍手を送ってくれた聴衆は、同じ国の人間としてそれ程違わないはずである。

人間とは感動を共有する一方で、冷たく拒絶もできるのであろうか。これは肯定せざるを得ない一律背反なのだろうか……。

ルトに着いたのか？ いや違う。

驚いた黒坂は「三木さん」と同じコンバートメントに居たプロデューサーを呼ぶ。瞬間的に事故を感じた三木が駆けつける。見れば、二十個近い楽器ケースの三分の二は外に運び出されている。駄目だ、これはフランクフルトへ運ぶのだ」と、ポーターを指揮している車掌に説明する。数人の団員も急を知って集まり、福田が保管している書類を見せて一件落着。ポーターたちはうんざりした表情で十数個のケースを荷物室に運び込み、汽車は出発。

荷物を調べて驚いた。荷札はパリ東駅行きになっているではないか。四日前、ライプツィヒからパリ入りした時のものがそっくり残っていたのだ。どの旅行でも飛行機移動のあと、責任者が口うるさく前の荷札をはずすように指示していたし、よく気の付く団員たちは自発的にやっていたのに、汽車ということと、花のバリーに全員浮かされてしまっていたとしかいようがなかった。駅までの輸送と手続きを担当したバリーの業者も手抜きだし、一車輛を売ったフランス国鉄だつて新しい荷札くらいつけてもいいではないか。そんな思いをさまざまに胸に去来させな

「海外公演プロデュースを振り返って」

●三木 稔

今回の海外公演では、過去の最高のものと並ぶ確かなりアクションを得た。このことをいかに日本に報告すべきか、企画製作者である私は迷いに迷った。旅行の終り頃には綿密な短文を用意し、ジャーナリズムに発送する用意までした。今回の助成者である国際交流基金や、度々助成を頂いた文化庁からの金は、いわば国民からの援助であり、公演の結果を公に伝達することは国民たる私たちの義務とも考えてきた。また、他に類型のない日本音楽集団の海外公演は、自分たちが成果を伝えるしか方法のないのも事実であった。現地の批評を記して伝える方法もあるが、帰国までに集め得なかったし、批評の実態は、時にコンサートの昂奮とうらはらであり、聴衆や、再来を求めるプロモーターの感触とあまりにも次元を異にすることが多かった。

こうして年毎に聴衆を増し、確かな手応えを繰返していく中で、この楽団が世界の人気者の一つになりつつある確信を参加団員たちは皆しつかりと感じていよう。私個人からの報告など意味を成さない。団員たちの声を伝えねばならぬ……そう考えて、私は用意の原稿を捨てた。(帰国後、毎日新聞より要請を受け、原稿をあらためて書いた。十二月五日付夕刊を参照されたい。)

日誌は輪番で、すでに福田に依頼していたが、さらに帰国の機中で、参加者全員からの声をつのった。しかし残念ながら、書くことに慣れない彼ら全員から、その感動を熱く伝える文章を得ることは難しい。全く原稿を寄せなかった奏者たちも、公演旅行中は、自熱の演奏と直載な感動を表明していた。スタッフが私しかいないこの旅の途中、数人で本部役員を構成し、毎日の仕事をテキパキと処理する力も立派なものだった。彼らが演奏者であり、帰国後の多忙を参酌すればあきらめねばならぬであろう。唯、他の文化活動のラジカルな団体の例に比べ、そのあたりの不徹底が長年にわたるこの運動のウィークポイントになってきた。国内で充分な聴衆を持つだけでなく、まして近年のような運動閉塞の折与えられた場で技術を発揮するだけでなく、未知の人たちをあらゆる方法で引き入れる行動的演奏家集団に育って欲しい。

さて、一九七二年の第一次海外公演以来、ほぼ一年に一回のペースで世界に旅し、今回で十三次・六〇公演機会となった。

昨年のゲヴァントハウス管弦楽団日本公演初日の東京での「急の曲」が、オケ側の準備不足と極度の疲れで期待に背く上演に終わったことが私には痛恨事であった。第十三次海外公演は、十三という数と、当初の資金事情、そして必ずしも好調ではない団内の様子が私



ヘルシンキ駅、さあソ連に入るぞ



成田出発前、打合せは綿密に

がら、五、六人の団員たちは頑丈に貼りつけられた束独の荷札をはがすのだった。

たぶん、黒坂に一瞬のひらめきが起らなかったら、フランクフルトに到着した我々は、何故楽器が着かないのか理解出来なかったであろう。五時に起き、東駅前の朝食、六時何分かの発車、と頭をめぐらせ、荷物はたしか隣りの荷物室に入れたと想い出すが、車中の快よい朝寝の間に天国に消えた楽器の怪を解きほぐすことは誰にも出来ない。次の日のベルリンのコンサートは、ほぼ確実に不可能であつたろう。そして、あのコミッシュ・オパーでの海鳴りのような聴衆の声援に出会うことも出来なかったのではなからうか。勿論、旅の準備は手抜きなく、何重の安全策も構じていた。乗換えのフランクフルト駅頭には、郵船航空を通じて廻してもらった英語をしゃべる美人のガイドが、いざという時のために待っていた。しかし、最も早く原因をつきとめられたとしても、あの非能率的なフランス国鉄に貨車を用意させ、西独を通過して、あの通関の難しい東ベルリンに七百キロの楽器を送らせるには……何十万円の臨時出費による赤字をどう処理する?……税関、

に重く重くのしかかっていた。成功の確信を秘かに持てたのは、パリやソ連が確定し、考えつづけていたBプロの構想が出来た八月も半ば過ぎだったろうか。今後のためにあえていうが、海外公演の成否は、出発までに九〇%が決まるものなのだ。

ゲヴァントハウスとの四回、ヘルシンキ・フィリとの一回の上演、そしてそのための綿密なリハーサルを通して、大部分の団員の中に「急の曲」を演奏していく楽しさが湧き出し、オケの人たちとの間、そして異国の聴衆との間に音楽上の霊波のようなものが流れ始めたのを見て、昨秋の悔いはつぐなわれ、この曲での私の責任が全うされたことを知った。それは去る四月の井上道義指揮・新星日響との公演でも既に感じ始めていたことだった。クルト・マズア指揮のゲヴァントハウスとの協演は既に一回となり、マズア氏は数年前アメリカでの東西の出会いを計画中である。初顔合せのペルティ・ベッカネン氏やヘルシンキ・フィリも、最も好きな現代曲として再演の機会を希望してくれている。

集団単独公演については、まず、われわれのことをきちんと掴んでいなかったソ連で、強い印象を残し、彼らに将来の公演の期待を大きく持たせ、政治家にかわって、ささやかな平和の使いになれることを確認できた。次に、成功が難しいと札付きのパリであれ程の支持を得、そして、パリを対象に考え出したBプロの仕上げであったベルリン第二夜で、「巨大」の直後に起ったあの聴衆の爆発を実感し、私たちが二十年間かけてきたこの集団という花の満開を見る思いであった。

今までも、もちろんベストを盡してきた。ピークであった七八年に確定したAプロは今も生きている。しかし、あの満堂のコミッシュー・オパーの揺らぎは、あるはずだ」と常に私に期待させていた夢の実現であった。しかもそれは単独公演の最後の機会、私が臨場できるラスト・チャンスに訪れた。この素晴らしい団員たち、生活の保障何一つないのに、いい演奏の場を与えてやれば完全に燃焼できる練達者たち。今からこそ、世界の人気楽団の一つという譽れを肩に、堂々と歩けるものを……の思いが瞬走った。

私は、演奏者との共同作業によって現代の中に人間性を取り戻せると信じてきた。二十年もたてば、一度醒め、互いの甘えを捨てて期間が必要と思う。勿論、この運動の熱心な提唱者だった者として、外にいて手伝うつもりだし、過去に私が提出して未着手のいくつかのプランも実現に向けて欲しい。日本音楽集団はかけがえない日本民族の顔なのだ。

この十三次にわたる公演を度々助成して下さった国際交流基金、文化庁、そして東欧関係への強いコンタクトをとってくれたジャパン・アーツ、今回については、特にパリ公演の生みの親となった宮崎氏はじめ電通ヤング&ルビカムの皆さんと、理解深かったスポンサーの日産自動車、親身に切りつめに御協力頂いた郵船航空、それに日本にいて協力してくれた団員とプロデュースを補佐してくれた事務局の皆さん……心から感謝いたします。



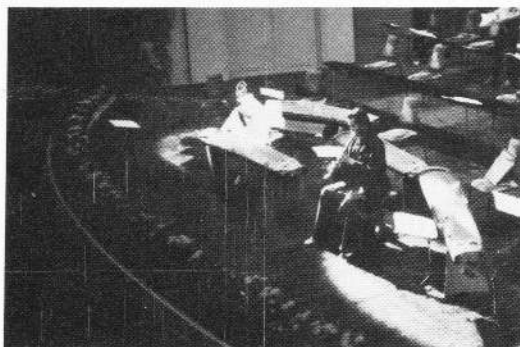
さてと、どれから開けるべきか



ゲヴァントハウス楽員食堂
二つの打楽器群のための交響曲



休憩時間はいつもこうだ

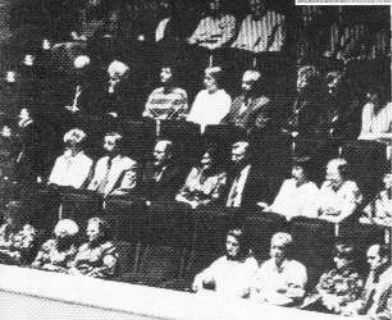


ベルリン、〈秋の曲〉の三橋、吉村

どこの税関に、誰が行く?……次の日しか予定のないマズア夫人の出演は?……と難問は続出したであらう。細心に用意したカルネという荷物通関システムは東側には通用しないのだ。東西間の電話もかかりにくい。かかってもし英語が通じない苦しみをいやというほど知っている。

十月十日十三時過ぎ、列車は無事フランクフルトに着く。殆んど団員たちは、何事も知らず寝足りてフラットホームに降り立つ。それぞれ何年にも及ぶ準備と、数数のメッツの奇蹟に助けられ、一九七二年以来、日本音楽集団の十三回にわたる海外公演は無事に終った。

ハリ、サルガポーのホスター前で、今回参加者全員



NISSAN présente
L'ENSEMBLE NIPPONIA

日本音楽集団

CLARTES
Nouvelles compositions
pour instruments traditionnels

SALLE GAVEAU

8 et 9 Octobre 1984 - 21 H

Billets à partir de 40F - Etudiants 35F

Renseignements/réservations : (1) 563.20.30 de 11H à 18H

45, RUE DE LA BOETIE - 75008 PARIS, ET AGENCES ET F.N.A.C.

Recette versée au bénéfice de l'ASSOCIATION ECHANGES EUROPE JAPON

Sous le patronage de l'ambassade du Japon en France

Avec le concours de la fondation du Japon et de l'association Echanges Europe Japon